

◎特別寄稿

## 何もなさずに歌う人

大崎清夏

◎ピックアップ《詩人・上田敏雄》

寄稿

### アイロニカルな祈りへの軌跡

～上田敏雄の詩の変遷～

渡辺玄英

### 鬼才・アヴァンギャルド詩人上田敏雄寸描

山本博信

◎企画展

「沸騰する精神——詩人・上田敏雄」

◎テーマ展示

「教科書で読んだ中也の詩

——思い出の一篇」

◎特別企画展

「富永太郎と中原中也」

◎開館25周年記念展

「ムットーニからくり文学館」

「清家雪子展——「月に吠えらんねえ」の世界」

◎記念館ニュース

開館25周年記念事業

主なできごと（令和元年度行事記録）

第25回中原中也賞受賞作品

令和2年度 行事予定

開館25周年をふりかえって

# 中原中也記念館

# 館報2020

25

Public relations magazine

第25号

Nakahara Chūya Memorial Museum

# 何もなさずに歌う人

text=OSAKI Sanyaku

大崎 清夏

静岡の田舎の中学生だった頃、私が

大事に鞆に入れて読んでいたのは、中也じゃなかった。それは賢治であり朔太郎であり犀星だった。彼らの詩に漂うファンタジーの気配、外国の気配、美しい女の子の気配、そういうものに憧れていた。自分でもそういうものが書きたいと思っていた。早く親元を離れて東京でひとり暮らししてみたかった——外国の都会のおしゃれな生活をまねてみたかった。国語の授業で「サーカス」や「汚れつちまつた悲しみに……」を読んだはずだけれど、残念なことになんかどう感じたかまったく記憶

がない。

夢を見させるものというより、戦争を重ねた時代の、貧相で滑稽な風景としてのサーカス。昔ながらの日本語の七と五の旋律で、汚れてしまったことを自嘲する拗ねた心。自分の将来の無限の可能性（―）にらんと期待していた優等生の私に、中也は暗すぎて映ったのかもしれない。

中也もやっぱり早く親元を離れて都会で芸術仲間に出会いたいと思っていたこと、外国文学から多くを学んだこと、その詩が詩壇ではなく音楽集団との関わりから出発しているということを『中

時代に生まれた私の家にはカワイの

アップライトピアノがあり、学生時代の私はどうしても弾いてみたかった。チェロを貯金をはたいて買ったけれど、結局うまく弾けた楽器はひとつもない。それでもギターを抱えてみると、ピアノの前に座るとき、チェロを自分の胸に立てかけるとき、いつも恋をしているように、私の心は発光していた。前掲の本を読みながら中也の「朝の歌」について考えていたとき、サイモン&ガーファングルの「Feelin' Groovy」が偶然ラジオから聞こえてきた。二〇年代の日本語の「歌」と六〇年代のアメリカ英語の「グルーヴ」では情感こそまったく違うものの、それぞれが届こうとしている風景には、同じ光が射しているような気がした。ふたりの歌っているのは同じ朝のことかもしれないと思った。

倦んじてし 人のこころを

諫めする なにもものなし。

(略)

土手づたひ きえてゆくかな  
うつくしき さまざまの夢。

と歌う中也と、

することなんてないし 約束もないよ

まだらで眠い僕 寝る準備は万端だよ

僕のうえに降らせよう 朝の時の花

びらを全部

と歌うポール・サイモン。

彼らが歌っているのは、何もすることのない朝の時間の慈しみかただ。サイモンは二度寝する気満々だが、中也は夢の消えていくのに任せている（たぶんサイモンのほうが中也よりすこしだけ真面目で忙しい人だったのだから）。

朝の慈しみかたを知る人は詩人だ。何もなさない時間に、その気怠さに居場所を与えることのできる人は詩人だ。私は自分がかっかりしてしまう。私は詩人としてすこし働かずの方だと思

う。最近長い付き合いの友達に「朝

メソッド」なる創作術まで吹きこまれて、朝の無為を味わうところではない。詩や音楽がくれるぼつかりとした隙間に折々蘇生されてこままで生きてきたのに、何かをなさねばならないという気持ちにいつも追い立てられている。いいものを書かなければ、人の心を打つものを書かなければという気持ちに苛まれて生活している。悲しくなってしまうのは、私もそんな無為の朝の歌

原中也 『沈黙の音楽』（佐々木幹郎著・岩波

新書）でちゃんと知るまで、私にとつて中也はやはりどこか遠い、暗い、拗ねた詩人のままだった。ふしぎなもので生きる糧としての「歌」を中也が心に抱いていたと知ったら、すぐ友達になれそうな気がしてきた。ほんとうにすみません、中也さん、誤解してました。や、実は私も「歌」やりたくて。そりや本気でですよ。中也さん、もしよかったですこのあとカラオケでもどうですか……？

いったい、音楽に憧れていない詩人などいるのだろうか。ゼロ弾きのゴーストを知っていると思うからだ。そういう朝に書かされた憶えがあるからだ。そういうときは、朝が歌うのを書き留めるだけでいい。それだけで詩になるからだ。私はもう随分、朝の歌を書き留めずにきてしまった。皿を洗いながら、洗濯ものを干しながら、夜道を帰るながら、鼻歌を歌うことはあっても——。あ、さては中也さん、酔っぱらつてますね。あんまり絡まないでくださいよお。

科学が個々ばかりを考へて

文学が関係ばかりを考へ過ぎる

文士よ

せち辛い世の中をみるがいいが  
その中に這入つちや不可ない

〔酒は誰でも酔はず〕より

そうですよ、ね、や、中也さんわかります……。でも私、明日までもう一本原稿のしめきりが……。戻さなくちゃならないゲラが……。検討しなくちゃならないパフォーマンस्पランが……。というわけで今夜はこの辺でお先に失礼します、また近いうち誘いますからあ。そのあと、拗ねた中也が何時頃まで飲んでいたか、私には知るよしもない。翌朝、なんにもしないで、中也は書く。

朝、鈍い日が照つてて

風がある。

〔宿酔〕より

ああ、詩だ。中也はちゃんと書き留めている。ほかのことは何にもしないで、朝の歌をちゃんと書き留めている。中也は詩人だ。中也はだめな人だ。なんて完璧な詩人なのだろう。

今年、はじめてメロディ先行の歌詞の仕事を引き受けることになった。中也の名前を頂いた賞を受けて五年、やっとな「歌」の仕事ができるようになったと喜んでる私は、優等生だった一〇代の頃と何も変わらない。中也を見ながら、もうすこしだめになったほうがいい。

大崎 清夏（おおさき・さやか）

1982年神奈川県生まれ。詩人。早稲田大学第一文学部卒。2011年、ユリイカの新人としてデビュー。詩集『指差すことができない』で中原中也賞受賞。近著に詩集『新しい住みか』（青土社）、絵本『うみの いいもの たからもの』（山口マオ・絵/福音館書店）などがある。第50回ロッテルダム国際詩祭に招聘。海外現代詩の翻訳紹介や、ダンス、音楽、美術などとのコラボレーションも多数手がける。

企画展「沸騰する精神——詩人・上田敏雄」を開催したことにちなみ、  
中原中也とも交流があった山口県出身の詩人・上田敏雄を取り上げます。

# アイロニカルな祈りへの軌跡 上田敏雄の詩の変遷

text=WATANABE Genji

## 渡辺 玄英

上田敏雄（1900～1982）は  
1926年の慶応義塾大学の学生時代、  
前年英国から帰国した西脇順三郎の講義  
を受講し、以降西脇の文学サロンで実弟  
の上田保や瀧口修造らと共に薫陶を受け  
ている。1927年には、北園克衛、上  
田保との連名で「薔薇・魔術・学説」誌  
に日本最初のシュルレアリスム宣言を發  
表しており、ある意味最も鮮烈な形で日  
本のモダニズムの形成にかかわった人物  
と言えよう。初期の彼の作品、1929  
年の第一詩集『仮説の運動』の詩は次の  
ようなものだ。

縮めた鷗をだいた 医術者のびあのの毆打  
医術者の成功  
医術者の成功  
びあのあるひは洋傘あるひはかふえの女  
かふえの女のJupon  
かふえの女のJupon  
かふえの女のJupon  
あるひは颱風

雨は自転車のように  
自分で歩いてやって来い  
雨は自転車のように？  
お喋りであってお呉れ  
おれも  
朝から  
回転させいれれば  
しゃべらないでよい自転車だ  
知るもんか  
べだるを踏んでいる奴が  
この黒ン坊が  
当てる御覧  
回転るまの友よ

「雨は自転車」などのシュルレアリスム  
のテキストが見て取れ、斬新なイメージ  
が面白い。初期の形式実験的な作風とは  
異なり、言葉の連結に柔軟性が見て取れ  
るだろう。また、自らを揶揄するような  
語り口と「回転るまの友よ」という呼  
び掛けから、軽率に変わっていく世界（社  
会）を批判し挑発する調子を感じられる。  
この路線には上田自身も手応えがあつ  
たのではないだろうか。その実りは、  
1956年に『近代詩壇』第20冊に發表  
された詩「アーネスト・ミラー・ヘミン  
グウェイの心」で味わうことが出来る。  
優れた詩なので全編を紹介したい。

虎の脳髓に人類の脳髓を比較したまえ  
虎のそれが人類のそれより  
やや混濁しているとすれば  
それは虎の進歩だ  
このホテルの絵葉書はい

初期のシュルレアリスムともアブスト  
ラクトの詩とも読める作品であり、意味  
が鋭奪された自律的世界を企図してい  
る点ではフォルマリズム的でもある。意表  
をつく奔放な言葉の組合せによる、暴力  
的かつ官能的なイメージ。従来の伝統詩  
歌からの切断があるばかりか、社会的あ  
るいは倫理的な文脈はおろか物語的情景  
も読み取れない。言葉の通常の関係を無  
効し、情緒や感慨といった内面を排除す  
る詩と解釈できるだろう。

かふえの女を締める鷗の洋傘  
詩「放棄あるひは自由」部分

私見では、この時期の上田敏雄の詩に  
はカンディンスキーやモンドリアンの絵  
画を連想させるものがある。例えば、大  
正の中期にかなり誤解された位置付けを  
されていたカンディンスキーではあるが、  
大正末から昭和初めにかけて、小原国芳  
の翻訳や村山知義の著作によりその革新  
性も広く紹介されている。当時、欧州の  
芸術思潮に飢えていたであろう芸術青年

混沌の美をにじませているのは  
虎の性慾の女からみるからだ  
こらんなきい  
煙草をくわえてそのへんを出入りする  
女も  
虎の足ざりだ  
さこでちがってるのだろうか  
なにもかも抜きとられる僕と  
なにもかも与えられる君と  
孤独なんて アウト・オブ・デイトだろうか  
やがて血の雨をながしてまたまえ  
そのブルーへなげこまれる石  
一個の星 一片の肉に  
快活なバツタ  
砂漠の緑地さ  
瞬間の生誕と破滅の爽快  
意味のなにか 女が男を創りたまえ  
われらの砂からの創造の王よ  
緑が白か 意味のなにかを創りたまえ  
そして  
あさ鷯の森と海と半島の偽装に  
うごりする絶対的な猫なきが  
その女のユリーンの影に消える

虎と人類とを比べながら、人類の在り  
方をアイロニカルに見ている。人は虎か  
らどれほど進歩しているのか分かりはし  
ない、というのが冒頭11行だろう。ヘミ  
ングウェイの文体といえばハードボイル  
ドだが、その突き放すような言葉遣いで、  
人の孤独など時代遅れにすぎず、「血の雨」  
のもたらしめた「ブルーへなげこまれる石」  
は「一個の星／一片の肉／快活なバツタ  
／砂漠の緑地」とイメージが飛躍し、皮  
肉を含んで爽快ですらある。そして最後  
の三行は官能的な危うい魅力を湛えてい  
る。あるいは、「あさ鷯の森と海と半島の

偽装」とは、朝鮮半島の騒乱（朝鮮戦争  
1950～53年休戦）からの連想によるもの  
かもしれない。「偽装」一語に、あざむく  
というネガティブなニュアンスを見れば  
そのような解釈できる。とはいえ、当時  
の社会情勢に結び付けなくとも、背後に  
たちこめている危機をうかがわせながら  
十分に熨鬱的なラストである。  
さらに注目すべきは「意味のなにか  
女が男を創りたまえ／われらの砂からの  
創造の王よ」の二行だろう。創造主＝神  
への呼び掛けあり、存在の（意味）を求  
めて宗教的な希求が表明されている。（ア  
イロニカルな祈り）、おそらく上田敏雄が  
最終的に辿りついたのは、人や世界を考  
える際、神の問題こそが決着の鍵になる  
という確信だったのではないだろうか。

愛  
十字架から  
漏れてくる  
雨の馬の毛  
君は確実な声で語る  
僕  
君の手に釘がある  
愛を創造する永遠の鉄の釘がある

たちがそれに関心を払わなかったとは到  
底思えない。  
この時期の上田の詩では、言葉が意味  
を奪われながら組み合わされイメージの  
喚起を企図する極めて人工的作品として  
作られており、それはカンディンスキー  
らも、より普遍的な絵画世界を目指した  
方向性と同じではないか。伝統詩歌の束  
縛を断ち切り、より（普遍的な詩）＝純  
粋な詩を夢みられたのが初期の上田敏雄の  
詩だった、と考えていいだろう。

しかし、上田は詩集上梓から二年後の  
1931年に沈黙期に入り、敗戦後の  
1948年頃までの長い間、詩作品の發  
表が滞っている。1930年代、軍国主  
義が次第に色濃くなり、自由な表現が抑  
圧されていたこともあるだろう。しか  
しそればかりではなく、上田は創作上の  
躓きによって沈黙期に入ったとも取れる。  
柴田基典の「上田敏雄ノート」（1982年）  
によれば柴田宛の私信（1981年12月12日付）  
に、初期の詩について上田は「幼稚なも  
の」でして、そんなものは別に取るに足ら  
ない」とにもなく切り捨てている。事実、

変貌ぶりに驚くほかない。何が上田に  
起こったのか分らないが、戦前の自身  
の詩観を全否定したかのように、意味を  
否定した詩から意味文脈重視の詩に転換  
している。しかも労働者を「蟻」、その妻  
を「山ノ神」とするなど凡庸な喩や主張  
に終始しているのが残念ですらある。もつ  
とも、さすがにこの路線では不毛と考え  
たのだろうか。あらためてシュルレアリ  
スムに舵を戻している。1954年に詩  
誌『尖塔』第12号に發表された詩「自転車」

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

戦後の上田の詩の変貌をみると、彼が初  
期の自身の詩の何を否定したのかが見え  
てくる。  
1950年に「詩学」10月号に發表さ  
れた詩「現実と希望（作品第二番）」は、  
戦後華やかなりし労働運動に材をとつて  
いる異色作で、この時期の上田の試行錯  
誤が窺えて興味深い。詩は「どんどん煙  
を吐く煙突を支へるのは俺達の労働意欲  
だ」という一行から始まる。部分を紹介  
しよう。

労働は蟻の労働だ  
社会は蟻の社会だ  
自由は蟻の自由だ  
さうだ 餓鬼共は山犬の如く元気だ  
山ノ神は豹の如く精悍だ  
（中略）  
俺達の財産は裸一貫だが  
見る  
鯉轡を立て祝ふのだ  
お嬢さんを飾り祝ふのだ  
俺達に 煩瑣哲学は無用なんだ  
俺達の将来には  
訓練する社会が 組織が必要なんだ

変貌ぶりに驚くほかない。何が上田に  
起こったのか分らないが、戦前の自身  
の詩観を全否定したかのように、意味を  
否定した詩から意味文脈重視の詩に転換  
している。しかも労働者を「蟻」、その妻  
を「山ノ神」とするなど凡庸な喩や主張  
に終始しているのが残念ですらある。もつ  
とも、さすがにこの路線では不毛と考え  
たのだろうか。あらためてシュルレアリ  
スムに舵を戻している。1954年に詩  
誌『尖塔』第12号に發表された詩「自転車」

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

初期の上田詩、具体的には第一詩集『仮  
説の運動』が目指した、空間を言葉のモ  
ザイクにしていく手法はすでに影をひそ  
めているものの、「十字架から／漏れてく  
る／雨の馬の毛」にはシュルレアリスム  
の痕跡を見て取れるだろう。そしてここ  
で肯定されるのは、永遠＝愛＝十字架に  
磔刑されたキリストのイメージである。  
デビュー時期において、言葉から意味  
を剝奪し純粹に自立する詩を目指した上  
田敏雄が最後に辿りついたのは、シュル  
レアリスムの手法を血肉としながら、「超  
越存在＝神」を希求する祈りを中核とす  
る詩であった。別の表現にすれば、言語  
だけで自律する詩から、思想を内在する  
詩への変貌とも言えるだろう。そこに戦  
前のモダニズム詩の挫折と、その挫折を  
乗り越えようとした戦後の苦闘を見るこ  
とが出来た。しかし「荒地」「列島」など  
の戦後詩の軌跡と異なるのは、上田がそ  
の思想的根拠に、アイロニカルな祈りと  
して宗教を措定した点にあった。上田敏  
雄が最後に目指したものは、人の些末な  
感情や世俗的な理性を超越した何ものか  
への、到底実現し得ない軌むような希求  
の言葉だった。

# 鬼才・アヴァンギャルド詩人 上田敏雄寸描

text=YAMAMOTO Hirohisa

## 山本博信

常盤の丘に 胸張り歌え  
世紀の花環 友よ担わん  
毀れぬ剣 磨きて  
時の試練に 打ち勝たん  
おお 宇部高専  
（宇部工業高等専門学校校歌より）

難解で一般凡人を寄せ付けない次代の孤高前衛詩人上田敏雄は、宇部高専の初代英語教官で校歌作詞者であり、私の大学時代の恩師であった。また、その後、高専で4年間研究室を共にした。

私がまだ田舎の高校に勤務していた昭和41年5月初め、突然、上田敏雄から高専の校歌作詞の手紙を受け取った。それはヘビーなロックンローラーがリリカルなアリアを詠唱するかのような驚きであった。これより校歌完成まで私信の遣り取りがづづいた。現在、手許には8通のハガキ・封書が残っている。私信は上田が歌詞中のフレーズや表現の可否、適否、

要不要などの判断・意見を私に質し、私が愚見を返すというものであった。上田敏雄が私に私信を宛てたのは、思うに、前衛詩人による歌詞が校歌として凡人の一般的理解の範囲内にあるか、また、曲付けに堪えうるかを確認したかったからに違いない。

校歌作詞を固辞していた上田敏雄が引き受けることになったのは、校長山県清のたつての口説き落しによるものと思われる。ものの本質を見極め、一気呵成に回転運動する詩人の激越な沸騰精神を買ったことだったのであろう。

歌詞は最初から、案に違わず、上田敏雄自前のシニールなワードが大暴れして、面目躍如たるものがあつた。「ニヒルの源 打ち砕け」、「光遍しペガサス翔り」等々。上田は後に、校歌のテーマには「原子の灯」のイメージ化を考えていたと述懐している。そのイメージは「太陽」であつたらしく、どの歌詞稿にも常に一貫して太陽のイ

メージへのこだわりが見られた。（雄々しく太陽が昇る）、（太陽よ昇れ）、（原始の太陽の夢追わん）……。がしかし、結局は最終段階で、「太陽」は歌詞から消えた。作詞作業は思わぬ難産で、詩句詩行の書き換えや差し替え、加筆や削除の繰り返しで、凄まじい推敲の連続であつた。1日に3通ものハガキが舞い込むこともあつた。

この加筆・推敲の原稿修正への執念は詩人上田敏雄の生涯変わらぬ編集者泣かせの創作流儀である。その極めつけは、昭和33年のアヴァンギャルド詩集「鋭角・黒・ボタン」への「33秒のスポーツニク」投稿である。上田は8月3日から9月1日までの1ヶ月足らずの間に10通もの追加ハガキを編集陣の北園克衛宛に出している。用済み後の投稿は出版社に返却を求め、発行済みの作品掲載誌は作品頁に、直に書き込みや貼り紙をするのを常とした。これが「海坊主のようにイメージが湧く」と言っていた上田の流儀である。

9月末からの長い沙汰止みの後、年が明けて昭和42年正月、突如、校歌完成の知らせとともに歌詞表が届いた。別便で試験用のデモテープと譜面も届いた。半ペラ紙の歌詞表には曲付け済みで確定したはずの歌詞が一番から三番まで縦に整然と和文タイプされていた。が、意外にも、またしても訂正の朱が3箇所に入っていたのである。ネオ・ダダイスト上田敏雄の飽くなき猛烈沸騰執念がこの土壇場でも示されていた。

「無ノ字」に徹する修行僧がホッと見性するように、8ヶ月間作詞三昧に徹して一遍にパッと「原子の灯」が点火し、歌詞の完成を見たのに違いない。アヴァン

ギャルド詩人上田敏雄の魂が注ぎ込まれた天下に誇るべき校歌の仕上げであつた。校歌完成の年の4月に私が高専に赴任した際、上田敏雄が私に言ったのは、「校長の山県さんという人は、ちよつとこの辺にはいない立派な人ですよ。」というのであつた。この山県清校長は上田を評して、「ロケットのような男じゃーどっちに向かつて噴き出すかわからん」と言っていた。地下に溜まったマグマを噴き出す火山のように、一歩たりとも退かぬ勢いで核心を純粹に激越に直撃する沸騰詩人の姿を了解してのことであつた。

宇部高専では「研究報告」なる紀要が刊行され、また、論文投稿者の口頭発表会があつた頃のことである。御大将山県校長はいつも会場の正面席に陣取り、発表者一人一人に必ず何か質問していた。「ジョイス論」を投稿した上田がそうした発表会で、「無いというものは有ることである。無い有である。有は無である。」と獅子吼すると、すかさず校長は質問を發した。「何ノオ？無いが有るノオ？有るが無いノオ？」。上田、大声激語でこれに答えていわく、「素人は黙ッチョレ！」と。これこそ上田敏雄の真骨頂である。シニールアリストの面目躍如である。

上田敏雄ほど詩の世界における同志や同伴者を持たなかつた詩人はいない、と鶴岡善久氏は言っている。私は現実世界においても山県の外に上田に友人はいなかつたと思う。「自分が高専に来てよかつたことは山県さんを知つたことですよワァ！」。今に私の内耳にひびき、脳裏を離れない先師のコトバである。

（やまもと・ひろのぶ 宇部高専名誉教授）

明治33年、現在の山口県防府市に生まれた上田敏雄は、慶応義塾大学文学部英文科在学中に詩壇に登場、昭和3年に、弟の保、北園克衛と連名で、日本初のシニールアリスム（超現実主義）宣言を発表します。そして、昭和4年には詩集「仮説の運動」を刊行し、大きな反響を呼びました。その後中断を経て、戦後に詩の発表を再開。昭和57年に81歳で亡くなるまで、新作を発表し続けました。中原中也とは昭和6年に入学した東京外国語学校の同級生の間柄で、中也是詩集「山羊の歌」を上田に献呈しています。本展は、絶えず変化し、常に新しい詩精神によって詩をつくり続けた詩人・上田敏雄の全貌を、貴重な直筆資料の展示を中心に紹介しました。

に加わり、最新の西欧芸術を学び、様々な詩的実験を行いました。展示2では、初公開のスケッチブック7冊の展示により、上田が行った詩的実験について紹介しました。

### 展示3 上田と中也とシニールアリスム

上田は昭和6年、東京外国語学校に入学し、そこで中也と同級生となり、交友を深めました。しかし詩に対する二人の方向性は異なり、中也是シニールアリスムの詩論などに一定の理解と敬意を示しながらも、総体では否定的にとらえています。展示3では、上田と中也の交友と、二人の詩作における立場の違いを中心に紹介しました。

### 展示4 外部へ、さらに向こう側へ

昭和6年頃から作品発表が激減し沈黙していた上田が、再び作品を発表し始めるのは、昭和23年頃からです。沈黙期後の上田は、昭和初期の自らの詩を全否定し、キリスト教や社会主義思想に基づいた作品を制作し、さらには、キリスト教のカトリックにおける世界観を土台にしながら、より進化した新世界を言葉でつくりあげる詩想へと展開していきま

### 展示1 上田敏雄 「未だ誰も行ったことのない所」 へ向かった詩人の略歴

作家・堀辰雄は上田敏雄について「未だ誰も行ったことのない所」へ行つた、つまり、従来の詩では辿り着けなかつた新しい境地に到つた詩人として高く評価しています。展示1では、新しい詩の表現を求め続けた上田敏雄の略歴を紹介しました。

### 展示2 詩壇デビューと スクラップブック上の詩的実験

上田は萩原朔太郎に見出され詩壇に登場した後、西脇順三郎を中心とした詩人グループ

【主な展示資料】  
上田敏雄使用スクラップブック7冊（個人蔵、初公開）、  
上田敏雄宛献呈署名入中原中也詩集「山羊の歌」（個人蔵、初公開）



●企画展

# 沸騰する精神 ——詩人・上田敏雄

2019年4月17日(水) — 7月28日(日)

# 教科書で読んだ

# 中也の詩

## 思い出の一篇

2020年2月14日(金)→2021年2月14日(日)

※特別企画展期間(7月30日→9月27日)を除く



中原中也の詩は、中学校・高等学校の国語教科書に掲載されることが多く、教科書で出会ったという方も少なくないと思います。本展では、教科書に掲載された中也の詩を中心に紹介しました。「一つのメルヘン」「月夜の浜辺」など、いわゆる「定番教材」として広く知られている作品はもちろん、これまで1〜2回しか掲載されていない作品からもピックアップして紹介しました。また、教科書に掲載されたことはいくつか、教科書に載せたら面白いのではないかと、思う詩を紹介しました。

### 1 「定番教材」勢揃い

中也の詩は昭和24年発行の国語教科書に初めて掲載されてから、今日まで数多くの教科書に載り続けてきました。展示1では、高等学校の教科書で最も多く掲載されている「一つのメルヘン」、高等学校の教科書で最も多く掲載されている「月夜の浜辺」など、教科書に掲載される回数が多い「定番教材」となった中也の詩を紹介しました。

#### 《展示詩》

「一つのメルヘン」「月夜の浜辺」「サーカス」「汚れつちまつた悲しみに……」「北の海」「青」

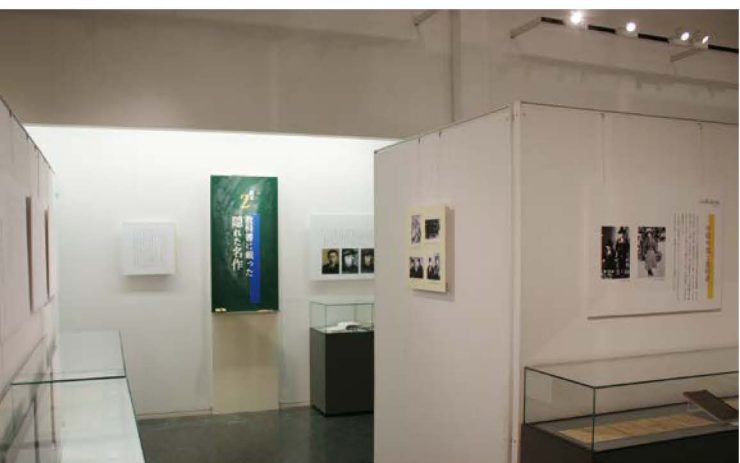


### 2 教科書に載った 隠れた名作

展示2では、中也の詩のなかでも、教科書にはこれまで1〜2回しか掲載されていないけれども、今後「定番教材」にしたい名作を紹介しました。「早春散歩」は、教科書にはこれまで1回しか掲載されていません。早春の晴れた空と、淋しい心を抱きながら散歩する〈僕〉の心境との対比を示すような冒頭の一行〈空は晴れても、建物には蔭があるよ〉が印象に残る作品です。

#### 《展示詩》

「言葉なき歌」「子守唄よ」「早春散歩」



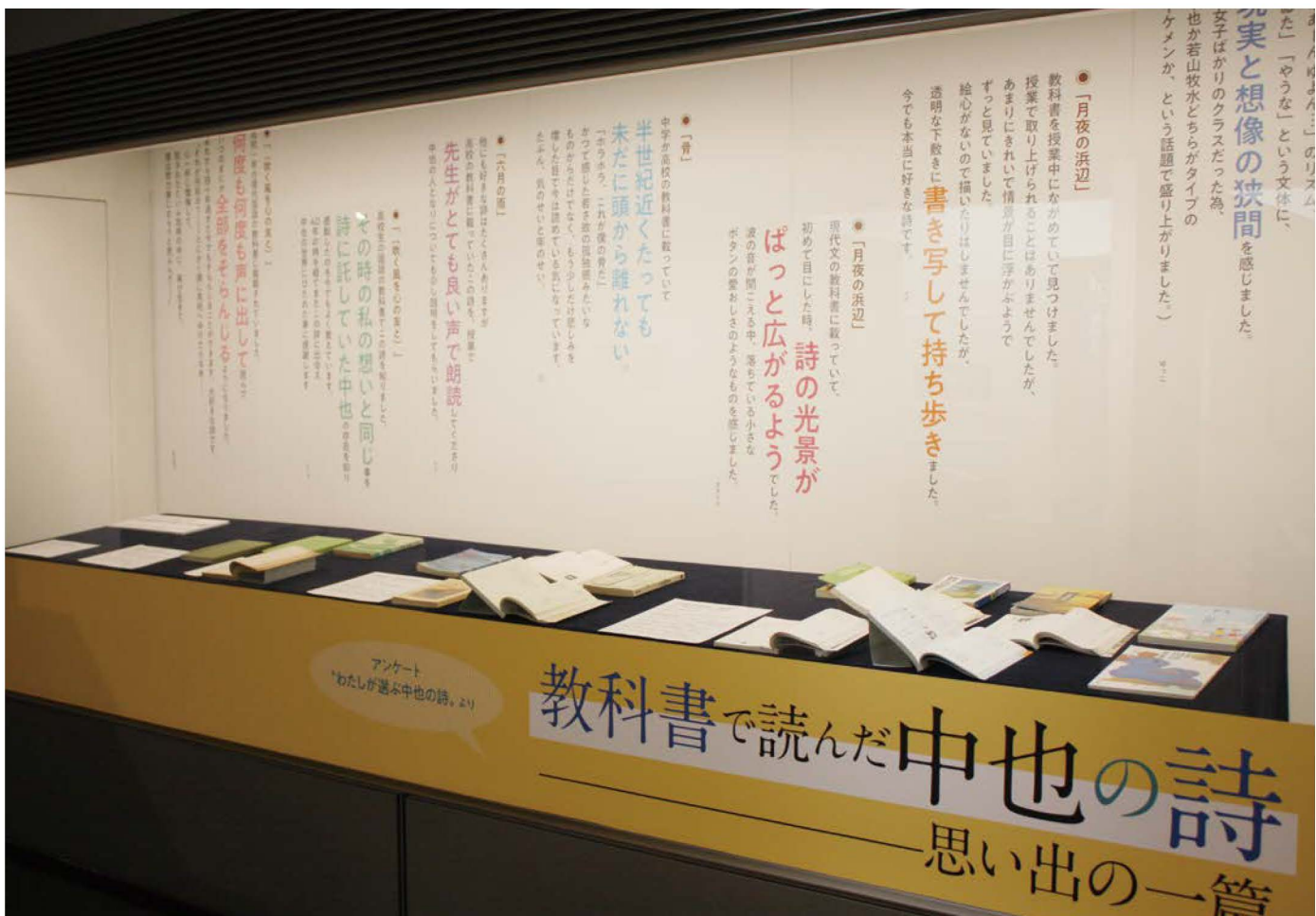
### 3 教科書で読みたい? 中也の詩

国語教科書に教材として掲載される作品は、学習指導要領に基づいた編集方針により選ばれるため、その方針が少なくありません。しかし、中也の詩のなかには、教科書には選ばれにくいかもしれないけれども、教科書に載せたら面白いのではないかと、という詩があります。

展示3では、教科書に載せたら面白いのではないかと思う中也の詩を、当館職員のコメントと併せて紹介しました。

#### 《展示詩》

「酒場にて(定稿)」「夏と悲運」「詩人は辛い」「(頭を、ポーズにしてやらう)」





特別企画展  
**富永太郎と  
 中原中也**  
 2019年8月1日[木]→9月23日[月・祝]

中原中也は17歳の時、6歳年長の詩人・富永太郎と出会います。フランス詩に造詣が深く、詩や絵画の創作に才能を発揮した富永は中也に大きな影響を与えました。二人は文学を通して意気投合し、時に嫌悪が混じり合う複雑な交友を結びます。しかし、富永は病魔に襲われ、二人に永遠の別れが訪れます。  
 本展では県立神奈川近代文学館所蔵の富永太郎資料を中心に、二人の関係性や詩の特性に迫りました。

協力・県立神奈川近代文学館

### 1 嫌悪に満ちた友情

大正13年、京都で立命館中学に通っていた中也は、正岡忠三郎と富倉徳次郎の紹介によって、詩人・富永太郎と出会います。二人は、文学を通して意気投合し、中也は富永との交友を通してフランス象徴詩の知識を吸収していきます。中也は全身で富永にぶつかっていきますが、富永は結核を発病したこともあり、二人の関係は次第に悪化していきます。  
 ここでは、京都における中也と富永の足取りを追いかけて、嫌悪と友情が混じり合う、若き二人の関係を紹介しました。

### 2 富永太郎の死 — 取り残された中也

病気療養のため東京の実家に戻った富永を追いかけるように、中也と恋人の長谷川泰子は上京しました。中也は富永の紹介によって、生涯の友となる小林秀雄と出会います。病状が悪化した富永は中也を避けるようになり、やがて亡くなりました。同じ月に、小林と恋愛関係になった泰子が中也のもとを去りました。相次ぐ離別の中で、中也は詩人として成長を遂げていきます。  
 ここでは富永が帰京してから亡くなるまでの二人の動向に焦点をあて、あわせて闘病生活の中で生み出された富永の散文詩を紹介しました。



### 富永太郎 — 芸術的感性の多様性

文学のみならず、絵画にも才能を発揮し、当時の前衛芸術や舞台芸術への関心も高かった富永。ここでは、文学以外の富永の芸術活動に焦点を当て、自作の版画やスクラップブック、友人宛の書簡に書かれた芸術評などを紹介しました。また、修復作業によって見事によみがえった、富永の絵画を展示し、当館の資料修復事業についても取り上げました。

### 3 富永太郎の詩世界

散文詩をはじめとする富永の硬質で密度の高い詩の世界は、のちの文学に多大な影響を与えました。  
 ここでは富永が愛読したボードレールや日夏耿之介との影響関係を探りながら、富永の作品とその文学史的な位置について紹介しました。

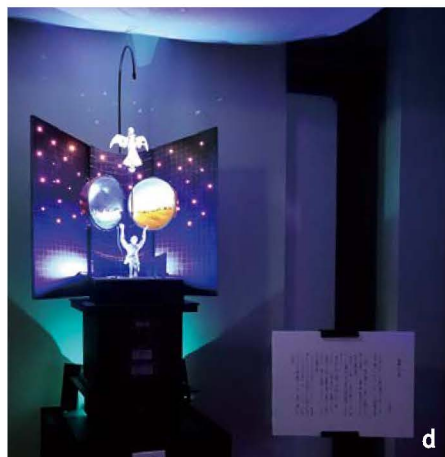
### 4 二つの個性 — 富永と中也の作品を 読み解く

自己を客観視し、理知的で硬質な言語感覚で散文詩の世界を完成させた富永。



己の感覚や感情を歌い上げ、それを重視し、音楽的な言語感覚で抒情詩の世界を作り上げた中也。  
 ここでは「散文詩と「歌」——それぞれの文学観」、「失恋体験と二人の「マリア」」、「自画像」と「自我像」の3つのテーマにそって、中也と富永の作風や文学観を比較しながら、両者の作品を読み解きました。

【主な展示資料】  
 富永太郎「詩帖1・2、中原中也「ノート1924」ノート小年時」、正岡忠三郎日記、中原中也筆富永太郎「ランポオへ」詩稿、中原中也原稿「秋の愁嘆」或る心の一季節「芸術論覚え書」他、富永太郎画「上海の思ひ出」「庭の隅」「M夫人とその娘」、富永太郎旧蔵「切抜帳」、富永太郎原稿「深夜の道土」「鳥獣剝製所」「遺産分配書」「秋の悲歌」「橋の上の自画像」他、富永太郎訳ボードレール「人工天国」翻訳稿



中原中也記念館開館25周年を記念し、文学の表現に新たな地平を切り開く気鋭の美術家、漫画家の作品を前後期に分けて取り上げる企画展「文学表現の可能性」を開催しました。

開館25周年記念展 文学表現の可能性【前期】

# Muttoni

ムットーニ からくり文学館

2019.9.26thu→11.24sun



**3** サークラス  
ブランコの影が揺れる  
荒野にて

本展のために制作された新作「サーカス」を初公開。中也の代表作「サーカス」の詩の言葉たちが、ムットーニ作品のなかで新たな命を吹き込まれました。また、「サーカス」制作のためのスケッチや人形のパーツなどの貴重な資料も展示されました。

【出展作品】  
「サーカス」f  
中原中也「サーカス」より  
2019年 作家蔵



**1** 透明な幽体としての  
プロローグ

ふたつの3体組作品「プリモ・テンポレ」と「エリア・キーパー」を「エンドレス・リフレクションズ」と題して、宮沢賢治の詩の映像と合わせた特別バージョンで展示。からくり人形、光、音楽、言葉が織りなすムットーニ・ワールドへと観客を誘いました。

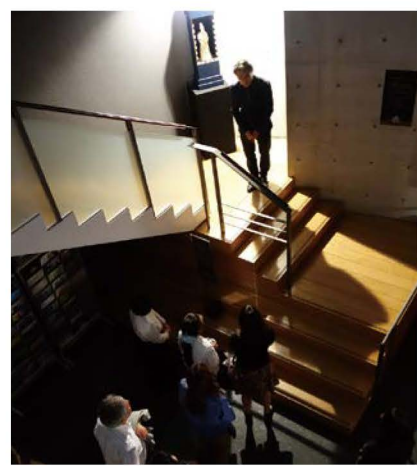
【出展作品】  
「エンドレス・リフレクションズ」a  
「プリモ・テンポレ」、「エリア・キーパー」  
宮沢賢治「序」（「春と修羅」）より  
2019年 作家蔵

「自動人形からくり箱」によって唯一無二の世界を創り出す美術家・ムットーニ（武藤政彦）氏。小さな箱のなかで、機械仕掛けの人形、音楽、光、作家本人の語り、舞台装置が巧みに絡み合いながら物語を紡いでいくその作品は、見る者の心を強くとらえ、魅了してきました。文学を題材とした作品も数多く制作し、独自の視点と表現手法により、題材となる作品に新たな光を与えています。

本展では、中原中也「サーカス」を題材とした新作（初公開）を中心に、文学をモチーフにした作品を紹介しました。

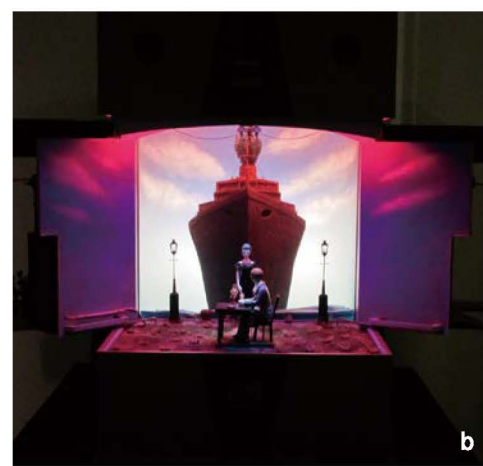
**MUTTONI**  
ムットーニ  
(武藤政彦)

1956年、横浜生まれ。1979年、創形美術学校研究科修了。ヨーロッパ外遊を境に粘土による人形制作に取り組み始める。人形、光、音、背景の転換などの要素を詰め込んだ箱、電動仕掛けによりストーリーが展開していくという独自の世界を確立し、その作品は高い評価を得ている。全国の美術館やアートスペースで展覧会を多数開催。【ムットーニ 公式ホームページ】<http://www.muttoni.net>



**イベント**

ムットーニ氏の口上つきで作品を鑑賞することができる「ムットーニが語る！ 作品上演会」や、夜の記念館にて新作「サーカス」制作秘話と上演会を楽しむ「スペシャルナイトツアー」を開催。多くの方がムットーニ氏の語りと作品に魅了されました。



**2** からくり文学館

中原中也、萩原朔太郎、ジュール・シュペルヴィエルの詩や小説をモチーフにしたからくり作品を紹介。物語が動きだすようなその作品世界には、読むばかりではない文学の新しい楽しみ方を見出すことができます。

【出展作品】  
「題のない歌」b  
萩原朔太郎「題のない歌」より  
2016年 世田谷文学館蔵  
「ロスト」c  
中原中也「失せし希望」より  
2011年 個人蔵  
\* 中原中也記念館バージョンとして中也の詩「失せし希望」とともに上演。  
「アトラスの回想」d  
中原中也「地極の天使」より  
2015年 世田谷文学館蔵  
「ワルツ・オン・ザ・シー」e  
ジュール・シュペルヴィエル「海の上の少女」より  
2006年 個人蔵



展示3

【主な展示資料】  
 中原中也詩集『山羊の歌』、中原中也原稿「坊や」  
 「夏の夜の博覧会はかなしからずや」、高村光太郎詩集『智恵子抄』、草野心平詩集『第百階級』、  
 宮沢賢治詩集『春と修羅』、雑誌「白痴群」「歷程」  
 「四季」「文学界」他

イベント&グッズ  
 event&goods

中原中也記念館×山口市立中央図書館  
 山口市立中央図書館とのコラボで記念館・図書館に自由に撮影できるフォトスポットを設置。また、図書館の共同利用スペースを会場として、数々のたぐらみに満ちた『月に吠えらんねえ』の世界を参加者の皆さんと一緒に読み解いていくファンタック「チューヤ篇」を令和元年12月15日に開催しました（令和2年3月21日に予定していた「朔、その他のキャラクター篇」は新型コロナウイルス対策のため中止）。

まちじゅう図書館発↓中原中也記念館行  
 期間中、まちじゅう図書館参加店舗に『月吠』登場人物たちの書籍を設置。また、参加店舗でオリジナルの葉を配布し、葉を持って記念館に入館された方に限定ポストカードをプレゼントしました。



開館25周年記念展 文学表現の可能性【後期】

# 清家雪子展

『月に吠えらんねえ』の世界

2019年11月27日(水) ▶▶▶ 2020年4月12日(日)

## 1 漫画家・清家雪子

平成12年に「孤陋」により「月刊アフタヌーン」（講談社）の新人賞であるアフタヌーン四季賞で大賞を受賞してデビュー。「秒速5センチメートル」「まじめの時間」（講談社）を経て、平成25年に連載を開始した『月に吠えらんねえ』で第20回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞を受賞するに至る清家雪子氏の経歴を紹介しました。

【展示資料】  
 書き下ろし色紙、「孤陋」原稿、コミック「秒速5センチメートル」



書き下ろし色紙

## 2 『月に吠えらんねえ』の世界I

『月に吠えらんねえ』の世界I  
 『朔くんをめぐる詩人たち』  
 作品の舞台と主な登場人物を概観し、重要な役割を担っている「朔くん」「白さん」「犀」「ミヨシくん」を取り上げ、それぞれのキャラクター造型のモチーフとなった萩原朔太郎、北原白秋、室生犀星、三好達治の事実上の関係や作品を紹介しました。

【主な展示資料】  
 萩原朔太郎詩集『月に吠えらんねえ』、『水島』、萩原朔太郎原稿「我れ持たざるものは一切なり」、北原白秋詩集『思ひ出』、室生犀星詩集『愛の詩集』、三好達治詩集『朝葉集』、雑誌「感情」「卓上噴水」他



展示2

## 3 『月に吠えらんねえ』の世界II

『月に吠えらんねえ』の世界II  
 『チューヤくん』『コタローくん』『ぐうるさん』『車掌さん』を取り上げ、それぞれのキャラクター造型のモチーフとなった中原中也、高村光太郎、草野心平、宮沢賢治の事実上の関係や作品を紹介しました。また、清家氏が「中原中也記念館報」第21号に寄稿して下さった「夕焼めぐり」全篇を、関連資料とともにパネルで読んでいただくコーナーを設けました。

## 4 『月に吠えらんねえ』の世界III

『月に吠えらんねえ』の世界III  
 『戦争詩・愛国詩へのまなざし』  
 作品の主要なテーマである戦争詩・愛国詩を取り上げ、作品を通じて清家氏が問いかけている問題を紹介しました。

【展示資料】  
 日本文学報国会編『辻詩集』、室生犀星詩集『日本美論』、高村光太郎詩集『記録』『典型』



記念館フォトスポット (AR アプリで撮影)



図書館フォトスポット



ファンタック



オリジナルグッズ

オリジナルグッズ  
 登場人物たちの作品を集めた詩集『在りし日の詩』やしおり、クリアファイル、雑誌「四季」などを制作し、販売しました。



まちじゅう図書館



25周年

中原中也記念館は2019年2月18日に開館25周年を迎えました。本号の記念館ニュースでは、この1年間に開催されたさまざまな記念事業やイベントを紹介いたします。

「中也くん」LINEスタンプ発売!

ついに実現! SNSアプリLINE上でやりとりできるスタンプを販売開始しました。絵柄は詩の一節や「山羊の歌」表紙などの他、中也のエピソードに基づく全24種類。「頼みがあるんだ」をこぞとという時に送ったり、「ひとりカーニバル」に癒やされるといってお声もいただいています。スタンプを通じて中也の詩の世界や人柄が見えてくるかも。まだ手に入っていない方はぜひ!



LINEスタンプ「中也くん」の購入ページ



開館25周年記念グッズ「サーカス」モバイル



平成26年度特別企画展「中原中也と日本の詩」の展示のために制作され、その後、平成28年度企画展「中也、この一篇——「サーカス」」の展示でも来館者に強い印象を残し、好評を博した「サーカス」モバイル。揺れ動く「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」の文字と影によって詩の世界が表現された展示作品です(デザイン・制作 林千代、ヤの舞台美術)。

かねてから商品化を望む声があがっていましたが、構想から数年を経て、ついに開館25周年記念の限定グッズとして誕生しました。実際の展示作品を縮小し、一点ずつ手作業で作られています。ご購入くださった方々はどんな場所に飾っているのでしょうか? 日々の生活のなかで中也の言葉に触れるツールとして親しんでいただければと願っています。(※限定品のため令和元年12月末で販売終了)

VOICE SPACE コンサートツアー



山口公演の様子

詩と音楽のコラボレーション集団VOICE SPACEによるコンサートツアー「アラベスクの飾り文字」が、「中原中也記念館開館25周年記念」を冠して、山口、松江、広島、鹿児島、西日本各地で開催されました。

VOICE SPACEは平成17年の結成以来長く中也の詩を音楽を通して表現してきた音楽集団で、中也生誕百年記念事業、セカンドアルバム「声のまほろし」制作、館内BGM制作などの機会を通じて、記念館と深い関わりをもっています。今回のツアーでは、小林沙羅

映像展示アーカイブ



中原中也記念館では、展示室の吹き抜け壁面に、展示に関連した映像を投影しています。

毎年開催するテーマ展示と特別企画展の内容を動画で表現したもので、平成16年の開館10周年を機に始めました。展示で紹介している詩・散文のテキスト、主な展示資料、展示ごとにデザインされたビジュアル、オリジナルのイメージ映像などで構成されています。動画の制作を手がけてこられたのは映像作家・田邊アツシ氏です。田邊氏は映像展示作品の制作を振り返り、「一編の詩を一塊のビジュアルとして見た時の、行や連の配置の美しさや、仮名と漢字のバランスの妙に気が付き、甚く感動した」と述べています。

開館25周年を記念して、すべての映像展示作品をアーカイブとして館内の検索システムにて閲覧できるようになりました。また、アーカイブからセレクトした作品を、ウェブ上の特設サイトにて令和元年8月1日から令和2年3月31日まで公開しました。

トーク&ワークショップ「紙資料を未来へ——文学館のシゴト」

中原中也記念館では、平成27年度から館蔵資料の修復及び劣化防止処置作業を進めています。現在、直筆資料の大半と、貴重雑誌の一部は修復を終えました。この度、開館25周年記念イベントとして、当館の修復事業の多くに携わってこられた資料修復家の奏博志氏をお招きし、紙資料の修復保存に関するトークイベントとワークショップを開催しました。また、当館の資料修復に関するリーフレットを作成し、配布しました。

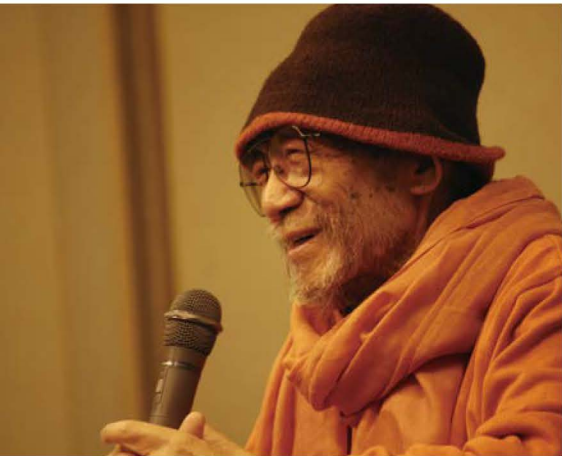


トーク「紙資料を未来へ——文学館のシゴト」

8月17日に開催されたトークイベントでは、奏氏と中原館長が登場。奏氏がプラズマ処理、リーフキヤスティングなどの修復技術について画像などを用いながら報告され、中原館長がその話を受け、修復された資料の資料的価値などについて解説をする流れでトークが進みました。紙資料修復のエキスパートである奏氏の貴重な話が聴けるとあって、会場は静かな熱気に包まれました。翌日行われたワークショップでは、奏氏のご指導のもと、中原中也と同時代に使用されていたノートと同じ綴じ方でノートを作りました。

大林宣彦氏講演「中也さんに導かれて、戦争史を訪ねる映画を作りました。」

9月14日、中原中也の会との共催により、映画作家の大林宣彦氏が「中也さんに導かれて、戦争史を訪ねる映画を作りました。」という題で講演されました。「野のななのか」



大林宣彦氏講演

中也忌「中也に捧げる夕べ」

中原中也の命日10月22日前後に行う追悼イベントのひとつとして、毎年「中也に捧げる夕べ」と題し、閉館後の中原中也記念館でコンサートを開催しています。7回目となる今

「花篋／HANAGATAMI」など、大林氏の監督作品には中原中也の詩が登場することが多く、最新作『海辺の映画館——キネマの玉手箱』でも、中也の詩が作品のテーマに深く関わってきます。講演では、幼い頃、ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」と中也の詩「サーカス」の一節を口ずさみながら抱き上げてくれた叔父の思い出や、新作映画に込められた現代を生きる人々への問いかけについてなど、内容は多岐にわたりました。長年中也の詩を愛読してきた大林氏は、「中也さん」と愛情を込めた呼び方で中也の詩について語っていらっしやいました。

年は、俳優・山本學氏の朗読と、ギターリスト・兼古隆雄氏によるギター演奏によるコンサート「朗読とギターのリヴァイヴ」を、10月20日に行いました。コンサートは山本氏の朗読の後に兼古氏のギター演奏が続くかたちで進行了ました。二部構成のプログラムで、第一部は、高村光太郎「荒涼たる帰宅」の朗読と、F・ターレガ作曲「エンターチャとオレムス」の演奏。中原中也「春日狂想」の朗読と、R・ロドニー・ベネット作曲「アリオソン」5つの即興曲よりの演奏、他3篇と3曲が上演されました。第二部では、レオ・ブスカリア「葉っぱのフレディ」の朗読とE・サインス・デ・ラ・マーサの組曲の一部などの演奏が交互に上演されました。演劇と音楽、それぞれの分野で長年活躍してこられたお二人の円熟味あふれる共演に魅了された一夜でした。この度の中也忌では、山口県立大学の学生による「メイシ交換会」、「幕前祭」もあわせて行いました。



中也に捧げる夕べ

2019年4月1日	特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続) 当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
17日	企画展「沸騰する精神——詩人・上田敏雄」(～7月28日)
21日	特別展示:第24回中原中也賞(～5月26日) 井戸川射子「する、されるユートピア」
26日	プロムナード・トーク① 企画展解説 入門編
27日	第179回 中原中也を読む会 第24回中原中也賞受賞詩集 井戸川射子「する、されるユートピア」を読む
29日	メキシコ交換会
29日	生誕祭「空の下の朗読会」(湯田温泉ユベルホテル松政) 自由参加の朗読、深川和美+高本一郎ミニライブ
5月24日	第24回中原中也賞贈呈式(湯田温泉ユベルホテル松政) 受賞詩集:井戸川射子「する、されるユートピア」 記念講演「中原中也に関するレクチャーと、 中原中也に触発された即興詩「サーカス～雪が降る」」 講師:赤坂真理 主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団
5月24日	第180回 中原中也を読む会 屋外展示「夢の詩」(前期) ——「吾子よ吾子」「夏の夜に覚めてみた夢」を読む
25日	プロムナード・トーク② 企画展解説 たつぷり編
6月22日	プロムナード・トーク③ 企画展解説 入門編
28日	第181回 中原中也を読む会 「沸騰する精神——詩人・上田敏雄」見学
7月5日	開館25周年記念 VOICE SPACE CONCERT TOUR 2019 「アラベスクの飾り文字」(山口市市民会館小ホール 他3ヵ所で開催)
14日	プロムナード・トーク④ 企画展解説 たつぷり編
26日	第182回 中原中也を読む会 著音器で聴く中也ゆかりの音楽
8月1日	特別企画展「富永太郎と中原中也」(～9月23日) オープニングセレモニー開催
3日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説
17日	中原中也記念館開館25周年記念 トーク&ワークショップ 「紙資料を未来へ——文学館のシゴト」 トーク(セントコア山口) 講師:秦博志 聞き手:中原豊 ワークショップ(山口情報芸術センター) 講師:秦博志
18日	第183回 中原中也を読む会 「富永太郎と中原中也」見学
24日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説
31日	機関誌「中原中也研究」第24号発行
9月14日	公開講演「中也さんに導かれて、戦争史を訪ねる映画を作りました。」 (ホテルニュータナカ) 講師:大林宣彦 共催:中原中也の会
22日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
26日	開館25周年記念展 文学表現の可能性(前期) 「ムットーニからくり文学館」(～11月24日)
	ムットーニが語る!作品上演会(～29日)



「空の下の朗読会」ミニライブ



ムットーニ上演会

中原中也の会

5月18日	中原中也の会第23回研究集会 「飯島耕一と中原中也——シリーズ 戦後詩人と中原中也3」 (國學院大学院友会館) 総合司会:正田雅昭 パネリスト:中原豊、加藤邦彦 講演「中原中也と飯島耕一——詩の型・形と自由の概念をめぐって」 講師:小池昌代
7月31日	会報第46号発行

9月27日	第184回 中原中也を読む会 「秋の夜に、湯に浸り」四行詩」と中原中也の日記・書簡を読む
28日	スペシャルナイトツアー ムットーニによる講演と上演会
10月16日	特別展示 第1弾(～27日) 中原中也原稿「含羞」、「春の日の歌」(初公開)
19日	メキシコ交換会(～20日)
20日	第4回「ぼうしの詩人賞～あつまれ!未来の中也たち!～」 表彰式・入選作品朗読会 入選作品展示(～2020年1月26日)
22日	中也忌～中也に捧げる夕べ 出演:山本學、兼古隆雄
22日	中也命日、墓前祭(経塚墓地)
25日	第185回 中原中也を読む会 「ムットーニからくり文学館」見学
11月2日	ムットーニが語る!作品上演会 (～4日)
3日	スペシャルナイトツアー
22日	第186回 中原中也を読む会 まど・みちおの詩を読む
23日	ムットーニが語る!作品上演会 (～24日)
	スペシャルナイトツアー
27日	開館25周年記念展 文学表現の可能性(後期) 「清家雪子展——「月に吠えらんねえ」の世界」(～2020年4月12日)
12月7日	山羊の日(～12月15日) 特別展示:高森文夫宛中原中也献呈署名入り「山羊の歌」、 中原中也「日記(雑記帖)」
15日	『月に吠えらんねえ』ファントーク チューヤ篇
20日	第187回 中原中也を読む会 福田百合子名誉館長と「湖上」を読む
2020年1月24日	第188回 中原中也を読む会 「清家雪子展——「月に吠えらんねえ」の世界」見学
2月14日	第17回テーマ展示 「教科書で読んだ中也の詩——思い出の一篇」(～2021年2月14日) 特別展示 第2弾(～24日) 中原中也原稿「この小児」、「冬の日の記憶」(初公開)
	「中原中也が結ぶ 福島と山口の絆」事業 講演「東日本大震災に学ぶ」(山口市立大蔵小学校) 講師:和合亮一 共催:山口市大蔵小学校PTA、大蔵自治振興会
15日	詩の創作ワークショップ 中也の言葉、わたしの言葉 (中原中也記念館、吉敷地域交流センター) 講師:和合亮一
18日	開館26周年
28日	第189回 中原中也を読む会 「教科書で読んだ中也の詩——思い出の一篇」見学
26日	特別展示:「中也の関係者が語る関東大震災Ⅱ」 全国文学館協議会加盟館との共同展 「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画(～3月22日)
3月31日	館報第25号発行

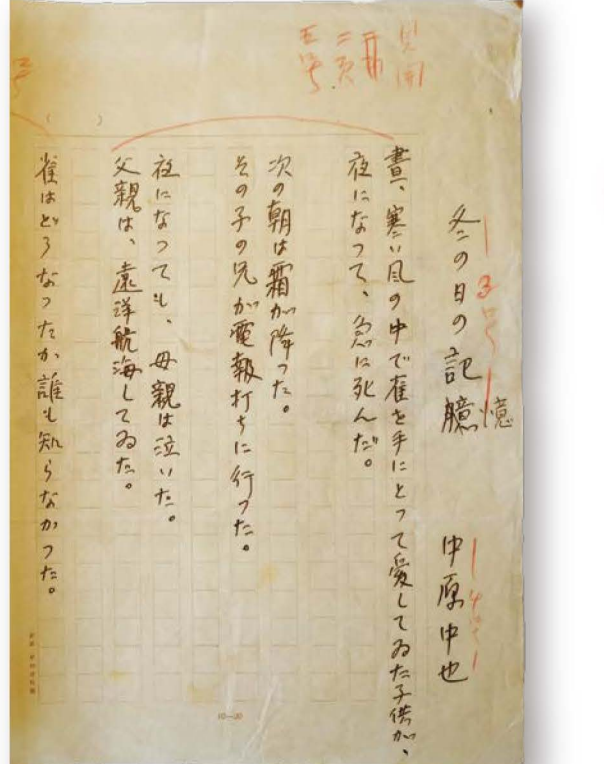
9月14日	中原中也の会第24回大会「演じられる中原中也」(ホテルニュータナカ) 総合司会:林秋絵 パフォーマンス「中也の言葉とわたしたちの声と」 映像:三角みづ紀、小林大賀 パフォーマンス:カニエ・ナハ 解説・トーク:カニエ・ナハ、小林大賀 聞き手:中原豊 講演「中也さんに導かれて、戦争史を訪ねる映画を作りました。」 講師:大林宣彦
15日	中原中也記念館特別企画展「富永太郎と中原中也」見学 解説:原明子
1月31日	会報第47号発行



「ぼうしの詩人賞～あつまれ!未来の中也たち!～」は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、平成28年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第4回目となり、応募作品79篇の中からぼうしの詩人賞(最優秀賞)1篇、優秀賞4篇、館長賞2篇が選ばれました。

中也忌にあわせて表彰式と入選者本人による作品朗読会が行われ、ぼうしの詩人賞には、中也がかぶっていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼうし」が贈られました。表彰後、朗読を好んだ中也にならない自作の詩を声にのせます。記念館で詩に親しんだ経験が、小さな詩人たちの心に広がり続けるよう願っています。

- ぼうしの詩人賞・最優秀賞
- 松村 歩美 さん
  - 優秀賞
  - 阿野 晶弥 さん
  - 又野 莉瑚 さん
  - 池田 美咲 さん
  - 三浦 雅登 さん
  - 館長賞
  - 田中 千晶 さん
  - 牛島 惇 さん



「冬の日の記憶」部分

令和元年6月、芦屋市在住の岩田英子氏・岩田宗久氏より中原中也自筆原稿が寄託されました。雑誌「文学界」に発表された際の印刷用原稿で、「この小児」(昭和10年6月号)「含羞」(昭和11年1月号)「冬の日の記憶」(同2月号)「春の日の歌」(同5月号)の4点です。後に第二詩集「在りし日の歌」に収められたことからわかるように、中也にとっても重要な位置を占める詩と考えられます。

受託を記念して、左記の日程で特別展示を行いました。「春の日の歌」「冬の日の記憶」は初公開で、多くの来館者の注目を浴びました。

前期 令和元年10月16日(水)～27日(日)  
後期 令和2年2月14日(金)～24日(月祝)  
「含羞」「春の日の歌」  
「この小児」「冬の日の記憶」

寄託資料特別展示

詩の創作ワークショップ

中也の言葉、わたしの言葉

福島市在住の中原中也賞受賞詩人・和合亮一氏をお招きして、令和2年2月15日に成年向け詩の創作ワークショップの第二弾「詩の創作ワークショップ 中也の言葉、わたしの言葉」を開催しました。

19名の参加者は前日始まったばかりの第17回テーマ展示「教科書で読んだ中也の詩——思い出の一篇」を見学して中也の詩から好きな言葉を30ほど選び、会場を吉敷地域交流センター研修室に移して、選んだ言葉をランダムに組み合わせたり、思いつく限りの言葉をスケッチしたりして、言葉の世界が新たに生まれてくる過程を体験しました。

和合氏はご自身の詩作体験も紹介しながら、言葉を通じて自分との出会い、人との出会いへと、参加者を誘いました。



